

感謝の溢れる日本

日本語を学ぶ時、先生が「授受表現」の文法について説明した。「授受表現」には恩恵的行為を表し、話し手の感謝の気持ちが含まれている使い方があると先生がおっしゃった。中国にはお礼をお返しをする文化はあるが、言語で行為に恩恵つける考え方はとても斬新すぎて、私には理解できなかった。最初は文法として頭に浅い印象が残っただけであった。

その後、日本に来て、日本人の友達の家にお邪魔した後、友達が玄関まで送ってくれた、そして「来てくれてありがとう」と言われた。何かありがたいだろう？と理解できずに「ありがとう」と言われたから、反射的に「いいえ」と言ってしまった。

本格的な留学生活が始まり、アルバイトもやり始めた。通訳として免税店に働いていたため、同僚は私以外全員日本人であった。お店には様々なお決まり言葉がある。例えば、お客さんに「お待たせしまして、申し訳ございません」ではなくて、「お待ち頂き、ありがとうございます」という。ネガティブな言葉をポジティブの言い方を転換するとひとの気持ちがよくなるとマネージャーが言った。確かに、謝ると「待たせるのは私の悪い」のニュアンスになるより、「待ってくれるお客様がいるのはとてもありがたい」の方が、主語を転換し、お客さんが中心になり、お客さんを褒める言葉になる。感謝の一言で、確実に空気を和らげられると思う。

私の業務訓練を担当するお姉さんは言葉使いと振る舞いが完璧と言える人であった。そして驚かせたことがあった。もし私がラッピングの手伝い、ガラス拭き、物戻しなどをしたら、お姉さんは必ず微笑みながら一々私に「オウさん、ラッピングありがとうございます」、「拭いていただきありがとうございます、きれいになりましたね」、「戻してくれてありがとうございます」などをという。感謝に値しないことに感謝されて、正直に言うと心細かった。日本語で言うと身に余る言葉であった。お姉さんは行儀正しい人なので、誰に対してもこんな行動をとるのだろうと思っていたが、他の店員と接触したら、全員「ありがとう」という言葉を惜しまなく使っていた。

日本人がご飯を食べる前に「いただきます」というのはなぜと日本語の授業で先生が説明したことがある。この授受表現の「いただく」とは、何を、誰からいただいたのか、誰に感謝を表しているのだろう。西諸国がギリスト教、中国は仏教とは違って、日本は古来「神道」を信仰していた。今でも人々は日本各地の神社に訪ね、参拝する習慣が残っている。この「いただく」とは自然災害の多い日本に食べ物を得られることによって、神様に感謝を表すという説がある。そのほか、犠牲になった食べ物に敬意を払うという説もある。

私はこういう感謝を惜しまない文化をうらやましいと思う。

中国にいる時もアルバイトしたことがあるが、飲食店にいても、コンビニにいても、実習教師としても、同僚に感謝された記憶はなかった。ただ言われた通りのことをやり遂げればよかった。逆に、やり遂げられないと叱られるだけだ。順調に、上手に仕事をできることは当たり前だと思われている。

仕事の場で「ありがとう」と言われる度に、「私のために思ったこと、とった行動にありがたい」と「頑張っていることはちゃんと見てるよ」とその裏の言葉も聞こえるような、心が励まされた。

友達に感謝されると、中国人同士だとたぶん「水臭いね」と言うのだろう。しかし、

言語の魅力はおかしく、日本語になるとその裏には「私は君の思いやりにありがたい」と「その優しさは当たり前ではないのを知っている」と感じられる。

電車やデパートのアナウンスに流れている「…ご利用いただき、誠にありがとうございます」、お手洗いのドアの裏に貼っている「いつも綺麗にお使いいただき、ありがとうございます」など、どんな些細なことでも「ありがとう」を言う環境に、私も色んなことを感謝したくなった。

先進から前進への道

授業中、社会学の先生が「1992年の日本と今の日本は大した変化がない」といい、ほぼ30年前、日本はもうこんなに高度発展していると、感心したと同時に残念だと思った。先進国とはいいい、ほぼ30年前から前進していない国というのか。

何十年間も変わらないままなのは中国に置き換えれば想像できない状況である。私の実家は中国広東省の深セン市にあって、1978年の改革開放政策により初めて経済特区として任命され、2019年現在は1000万人を超える大都市になっている。自分が一番実感したのは、小学校に通う時いつも走っていた蔦だらけのセメントの歩道橋、小学校卒業に近い頃は斬新な鉄筋コンクリートにガラスの天頂付きの高級歩道橋になっていた。小学校は古城の中に位置し、毎回城門を抜け通ったら野菜や果物、お魚とお肉など売っている汚くて騒がしい横丁市場があった。その市場は十年前消えてしまって、道が改装された後、観光スポットに一変した。お母さんが若い頃に働いていた廃棄されたアパレル工場も、鮮やかなペンキに彩られ、芸術センターのようなところになった。中国には様々な変化が起きている。

キャッシュレスを例としてあげれば、いま日本にはセブンペイ、ゆうちょペイ、ペイペイなど、色んなペイが出てきている。銀行で手続きをするとき、デパートで買い物するとき、各自のキャッシュレスアプリを勧められていた。日本語の練習になると思いながら、きちんと話を聞いた。「これを申し込めばキャッシュカードと繋がり、携帯だけでこのマークの付いている店に支払えますよ。こういうのは見たことなかったですよね。」

私が思ったのは、中国のアリペイはどんなに進んでいるのか知られていないようだ。アリペイとウィーチャットペイはすでに市場から海外のデパートまで使えるようになった。中国の若者のみならず、中高年層までキャッシュレスチャージを受け入れ、携帯だけ持つお出掛けはもはや常識になっている。キャッシュレスチャージ技術は中国のアリペイにお金を払っているのに、中国人の私は様々なペイを勧められ、「便利ですよね」と言われ、何とも言えない気分になっている。

日本人は本当に海外に無関心なのかと思った。

留学して半年後実家に戻り、自分は様々な変化に追いつけられないと感じていた。まずはアプリの発展が速い、デリバリーのアプリはあったが、今はさらに生鮮食品までデリバリーできるようになった。携帯やカメラなどの修理も即日予約の訪問修理ができ、シェアサイクルまた増え、家の周りは新しい店がどんどん開業した。そして、現在、中国の5G技術は世界トップと言われている。4G技術はキャッシュレスチャージの普及を促し、オンラインゲームと全民生放送の時代の爆発をもたらしていた。5Gの時代に中国はどんな変化が起こるの期待している。

知り合いのラーメン屋さんのオーナーは、日本で長年生活していた中国人であった。なぜ日本でラーメン屋さんをするのかと聞き、「卒業後中国に帰ったが、慣れなくてまた日本に戻ってきた」と答えていた。自分は中国の起きてる変化に期待していると同時に、「中国に慣れない」状況になるのは怖い。

今通っている大学は、留学生が在籍学生数の六分の一を占めている国際大学である。いつも思うのは、日本人は本当に海外に行きやすいことと外国人と交流しやすいこと。私がまだ中国の大学にいる時、学校中の日本人は日本人の先生二人だけであった。そして、中国のパスポートはビザを申請しないと行ける国は限られていて、さらにビザ申請には様々な制限がかかっている。それに対して、日本のパスポートの保持者がビザなしで渡航できる国は、2019年に190カ国となった。学校の中、海外に関心を持つ学生もいるが無関心な学生も多い。日本人にとって、海外を知るため絶好のインフラが整備されているのに（せめて中国より）、それを利用しないのは勿体無いとしか思わない。

お台場に行く日、景色の素晴らしいゆりかもめ線に乗った。晴れた夏の青空とお台場の赤い観覧車が互いを引き立てていて、私は思わずに目を見張った。重なっている雲と少しきらきらと光を反射している海、それに立派な現代建築群を見ていて、私の心の中に奇妙な感動が生まれた。誰かとこのようなきれいな景色をシェアしたくなる。だけど私の目に刺さるのは、電車の中に鮮明な黒いスーツ、死のような静寂に何が考え込むサラリーマンたち、まるで葬式に参加しているような鬱陶しい顔している。たぶん私を感動させた景色は彼らにとって極平凡な通勤道に見あきれた風景なんだろうかと思っていた。

今の日本は活気のない社会であり、一回サラリーマンたちと同じ通勤電車に乗れば実感できる。この少子高齢化社会における働く若者は平均二人で一人の高齢者養わなければならない状況に陥っているとされている。厚生年金をもらえる高齢者年齢はこれから先延ばしにされると予想される。このような高圧社会にとって、外国人労働者の受け入れと定着は重大な課題になると思う。

法務省入国管理局平成31年に公表された在留外国人数データにより、平成30年末における在留外国人数は273万を超え、過去最高となった。しかし、日本は未だに外国人労働者の受け入れ体制が未整備であり、低賃金、社会保障が不十分である等の国際問題が起りやすい。政府が長く単一民族国家主義的発想が消せなかったため、日本には民間の非営利組織と自治体が重要な役割を期待できる。カナダ、オーストラリア、アメリカの多文化主義法を見れば、言語・アイデンティティ・社会参加・差別是正などがキーワードとなっている。先進国である日本の前進する活気を取り戻すため、海外を知る・グローバル化の波に乗る以外他にないと思う。

私は留学生としてこれから日本の発展を楽しみにしている。